

“民”の発見

——民具・民芸から民俗まで——

佐野 賢治 (神奈川県立民俗学研究所)

キーワード

民具、民芸、民俗

1. “民”の発見—伝統と近代の相克

明治維新以来の日本の近代化の諸矛盾が露呈してきた大正末期から昭和の初期において、近代化に対して伝統的な生活文化の見直し、再評価をしようとする一連の動向があった。

提唱者の生年順で主な事績をあげてみると、

- | | |
|-----------------------|---|
| 民俗—柳田國男 (1875～1962) | 『民間伝承論』1934、『郷土生活の研究法』1935 |
| 民家—今和次郎 (1888～1973) | 白茅会編『民家図集』第一輯1918 (民家調査の最初の報告書)、後に考現学を提唱1927 |
| 民謡—町田嘉章 (1888～1981) | 柳田「民謡の今と昔」1927、1937年より町田式写音機で全国の民謡を採音。新民謡運動の提唱 |
| 民芸—柳 宗悦 (1889～1961) | 「日本民芸博物館設立趣意書」1926。『工藝』を創刊1931。日本民藝協会を設立『美と工藝』を創刊1934。日本民藝館の設立1936。『月刊民芸』創刊1939 |
| 民具—渋沢敬三 (1896～1963) | アチック・ミュージアム (屋根裏博物館) 設立1921、民族学会理事就任1934、「所謂足半 (あしなか) に就いて (予報)」1935、『民具蒐集調査要目』1936 |
| 民俗芸能—本田安次 (1906～2001) | 柳田・折口ら「民俗芸術の会」を設立1927。日本民俗芸能学会設立1984 (初代会長・本田) |
| 民話—木下順二 (1914～2000) | 関敬吾『島原半島民話集』1935 (“民話”の初出)、「彦市ばなし」1946、「夕鶴」1949。民話の会発足1952 |

など、従来、近代化の進展の中で取り残された頑迷で、汚ない、遅れたものとマイナスの評価しかされなかった庶民の生産・生活文化へ新たな視角から目が注がれた。柳田の民俗学がその集成といえた。今日考えるとなんともないが、当時庶民の日常生活に光を当て、その意義を説き、また学問の対象として考えたことは慧眼だったといえる。こうした庶民の生活文化に対する関心を、私は、“民”の発見、と呼ぶことにし、そのそれぞれの成立の事情を探り異同を確かめた上で総合し、学史上で意味づけたいと考えている。

2. 柳田の民俗学—経世済民、常民の幸福を求めて

柳田の民俗学については、多くの論考・評論がある。ここでは、柳田の嫌った儒教・仏教用語であえて表すと、柳田民俗学は経世済民（思想）を本尊とし、温故知新（学問）、知行合一（実践）を脇侍とする三位一体に特徴があり、戦後の日本民俗学が個別科学としての定立を志向したのと相違し、学問の目的を第一に問うたことを指摘するにとどめ、よく引用される一文をあげ再確認しておきたい（下線筆者）。

個々の郷土が如何にして今日有るを致したか、又如何なる拘束と進路を持ち如何なる条件の上に存立して居るかを明らかにし、その志ある者をしてこの材料に基づいて、どうすれば今後村が幸福に存続して行かれるかを覚らしむるようにより便宜をあたえてやらねばならぬ「郷土誌編集者の用意」1914

郷土を研究しようとしたので無く、郷土で或るものを研究しようとしていたのであった。その、或るものとは何であるかと言え、日本人の生活、殊にこの民族の一団としての過去の経歴であった、それを各自の郷土において、もしくは郷土人の意識感覚を透して、新たに学び識ろうとするのが、我々どもの計画であった

「郷土研究と郷土教育」1933

一国民俗学が各国に成立し、国際的にも比較綜合が可能になって、其の結果が他のどの民族にもあてはめられるようになれば、世界民俗学の曙光が見え初めたと云い得るのである。しかし、比較法の恩恵はその華やかなる夢を実現するには、今日はまだ十分に材料が揃って居ないという他ない

『民間伝承論』1934

柳田の言う郷土、今日風に言えば地域・領域の範囲・性格は、村から国、世界まで、その対象も村人から民族まで可変性を持つこと、そして何よりも、柳田は学問の目的が地域社会全体の幸福を求めることにあると一貫して説いている。中でも「家の光」の一文は、長短があるにせよ宮沢賢治の「世界全体が幸福にならなければ個人の幸福はありえない」（『農民芸術概論綱要』1926）と文意は一致しており、その背景に初代駐日フィンランド公使、C.J.ラムステッド博士（1873～1950）の影響が考えられる。言語学者である博士は、フィンランドの歴史地理学的方法を東大で紹介するとともに、農本主義というべきか農業が人間の生活にとって根本的なものであることを各所で説いていた。また、エスペランティストでもあり、日本のエスペラント運動に大きな貢献をした人物でもある。柳田も宮沢もエスペラント語には人一倍の関心を持った。柳田の『遠野物語』（1910）の話者、佐々木喜善もエスペランティストであり、当時の世界認識の思潮の具体的な表れの一つとして、このことは明記しておく必要がある。

柳田の郷土研究、民俗学は当時の日本の農村の抱える緊近の問題「農民はなぜ貧なるや」から、将来にわたる世界全体の人々の幸福の希求まで見渡していたのであり、一国民俗学の主張もその段階の一過程であったといえるのである。

また、柳田は、民間伝承すなわち民俗を、

- ①有形文化（生活外形）－衣食住など、「旅人」が「目」で見ることができるもの
- ②言語芸術（生活解説）－昔話・伝説など、長く滞在した「寄寓者」が「言葉」を理解し「耳」で聞けるもの
- ③心意現象（生活意識）－共同幻想など、郷土で生まれ育った「郷土人」が「心」で共感するもの

と3分類し、生活文化を物から心で、外面から内面に至る把握、最終的に共属・共感意識を共有する人々による郷土研究の重要性を説いた。近代化論からいえば、内発的な自己認識のあり方に帰着し、必然的に自文化研究とそれぞれの地域の生来の郷土人、ネイティブの人々により醸成された異文化との比較研究が要請されることになる。

柳田がいう民俗の国際的な比較総合をインターネット社会化した今日、どう考えるかは大きな課題であるが、ここでは柳田の分類から見ると、民具、民芸は一義的には有形の物質文化、物に現れた表象ということになり、人々の心意、精神文化に収束する民俗との関係性が問われることになる。

3. 渋沢の民具研究－共同研究による一級の資料の作成

渋沢敬三の造語である民具は、一般庶民が、その日常生活の必要から、製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の総称（『民具収集調査要目』1936）と定義される。渋沢は、日本近代資本主義の父と称される渋沢栄一（1840～1931）の嫡孫であり、19歳の若さで祖父の期待を負い渋沢宗家・爵位（子爵）を継いだ。祖父のモットー“論語と算盤”、学問と実践の両立を生涯貫き、自らは第16代日銀総裁、幣原内閣の大蔵大臣まで務めた経済人でありながら、学問を陰で支える裏方として、第一級の資料を学界に提供、また各種の援助を行った。

渋沢の学問に対する考えの一面は“ハーモニアス・デベロップメント”という言葉によく示されている。共同研究・学際研究の重要性を説き、早くに1921年、仲間とアチック・ミュージアム（屋根裏博物館）ソサエティを設立、戦後は九学会連合を組織して対馬調査に臨むなど、日本の人文科学ではなかなか実効性の上まらない共同研究を組織・推進した。また、「論文を書くのではない。資料を学界に提供する」（『豆州内浦漁民史料』）と自らの解釈・論考を提示するのではなく、あくまで学問の黒子に徹し、1934年日本民族学会の設立に尽力するなど斯学の振興を多方面から支援した。学際的であるのはむしろ、正確な資料を残すために時代の最先端の技術を導入したことは、足半の調査に、レントゲン撮影を試み、当時はまだ貴重品扱いであったカメラ、映写機を積極的に導入し、今日アチック・フィルムと総称される民俗映像資料を残したのである。

もともと生物学志向だった渋沢の学問の特徴は、柳田の民俗学と較べるとわかりやすい。漁民・漁村を主なる対象（→農民・農村）、有形・物質文化である民具に注目（→精神文化・心意伝承）、文字・非文字にかかわらず原資料を重視（→口頭伝承・民俗語彙の重視）、共同研究を推進（→柳田個人による解説）、索引・絵引き作成、博物館建設など資料公開を積極的にはかったことなどがあげられ、常民生活に関するあらゆる資料の収集・整理を研究者の

複数の視角、共同作業により、また最新の機器の利用もはかり可能な限り正確に記録し、その資料の利・活用に対しては公開・公平性を図ったのである。

しかし、両者のパーソナリティはかなりの違いを見せる。共にダンディでありながら温容とした渋沢の還暦記念のポートレイトをはじめ西郷どんのような着流し姿、それに対して柳田は世にいう白足袋の思想である。渋沢と写っている人々の写真は笑みが見えるのに、柳田と写っている人々の表情は硬い。一方は新華族の出であり、一方は日本一小さな家の出身であるのにその姿勢が逆転している。これは偶然の結果ではなく、渋沢の人間性、映像に対する取り組みがその背景にあることが近年の研究で明らかになってきている。

柳田が、文学→農政学→民俗学と展開したのに対し、渋沢が生物学的思考を持続し、銀行家など実業の世界と学業を並行させていたのも大きな違いと言える。柳田と渋沢の学問の性格と意義については、早くに敬三の二高時代の友人、有賀喜左衛門（1897～1979）が柳宗悦をその間におき、民俗－民具－民芸の連関から説いている（『一つの日本文化論』1976）。

近年では、柳田の『明治大正史 世相篇』、『明治文化史 風俗編』と敬三の編著『明治文化史』の生活編と社会・経済編の内容を仔細に比べ、近代化の中での常民生活の実態を描く共通項はあるものの両者の志向の違いを指摘する原田健一（「モノをめぐる渋沢敬三の構想力」『国際常民文化研究機構 年報』1 2010）の論などが行われている。

油井常彦は有賀も登場する旧制二高での渋沢の3年間は、彼に真・善・美、ヒューマニズムと教養を刻したといい、敬三の「私は真なるもの、美なるものにひかれる」の言葉を引き、事実をたくさん集める実証主義に繋がったとし、善については何が善であるのかは難しいからと語らなかつたと指摘している。（『歴史と民俗』30 2013）佐藤健二は人間として気高い心持を持つ、総合上の美として、渋沢は「チームワーク」、「ハーモニー」の語を適用したという。渋沢の人当たりの良さは、決して生来ではなく努力の賜物であったといえる。（同『歴史と民俗』30 2013）

戦前に高等教育を受けた青年たちは、世俗的な金・権力・快楽を超えた真・善・美に価値を認め、それを求めることが幸福であるとするドイツの形而上学、観念論哲学の影響を多かれ少なかれ受けていた。真・善・美へ対する希求とその表れが文化であり、芸術・学問・宗教がそこに至る道として考えられた。戦後、文化という言葉はアメリカの文化人類学的な語用の影響もあり、生活の全体、生活文化であるとの見解も徐々に普及していく。早くに庶民の日常性、生活文化に着目した柳田・渋沢・柳はこの意味でも先駆的であった。

実業家である渋沢自身は学術方面では表面には出ず、宮本常一ら研究仲間を作りその基盤づくりに尽力した。アチックミュージアムの収蔵民具は1937年、渋沢と高橋文太郎・今和次郎の尽力で保谷市にある民族学博物館に移され、1962年の閉館後、その民具標本約47,000点は国に寄贈され、文部省史料館を経て現在、国立民族学博物館に移され日本常民の生活を再現する一大コレクション資料として収蔵・展示され今日に至っている。渋沢は、一級の日本人の生活資料を後世に残したのである。

4. 柳宗悦の民芸運動－生活の中の用の美

民芸とは柳宗悦が、民衆的工芸を指して用いた言葉である。柳自身の言葉を借り、その対象と意味を示しておく、

民芸とは一般の民衆が日常用いる工芸品を指すのであります。即ち、日々の生活を助ける実用的な器物の世界をいうのであります。それゆえ生活の必需品であって、決して生活を離れた趣味品とか、骨董品とかを意味するのではないのであります。民芸品が重要な意義を齎らす所以は、これら日常の器物に、一番民族性の直接的表現があるからであります。民芸品の貧弱な国は、やがて国そのものの文化の低いことを意味します。それに民芸品は実用品であり、いわば働き手であるため、必然に健康な性質が呼ばれてくるのであって、この健康性ということこそ、やがて民芸の大きな美的内容を形造るものであります。(下線、筆者)

柳宗悦「北支の民芸」1941年1月25日放送講演(全集15巻所収)

よく知られるように、渋沢とアチックミュージアム同人による初期の収集品はおもちゃであり(河岡武春「アチックのおもちゃ時代」『民具マンスリー』)、いわゆる民具の蒐集と研究に目が注がれるのは、同人の早川孝太郎に奥三河の花祭りを案内されたことを契機にしてからである。有形文化である民具と民芸の差はどこにあるのか、ここでは問わないことにするが、三者がそれぞれの立場を主張していた戦前期、染木煦は、民芸品は民具の一部に含まれると明確に指摘した。

民芸は鑑賞を前提とする。民具の内、鑑賞に適する物を取捨選択して民芸品と称へ、近時、好事家の玩ぶところ、結句玩弄物となるに過ぎず。民具は然らず、其の物の美醜と新旧を問わず、又、健康的なると不健康的なるとを訊ねず、凡そ生活に必需のものはすべてこれを民具とする。

『北満民具採訪手記』1941

柳田の民俗学と柳の民芸運動の関係は、一度だけ『月刊民芸』での対談(1940. 3.22)があるものの、双方誤解が解けず、その後会い交わることなく平行線で終わったという。この時、柳田は民俗学を「過去の歴史を正確にする」学問とし、過去ではなく将来を射程におくという民芸運動に対して木で鼻をくくったような対応をしたという。その背景には、沖縄の方言問題に対する柳の政治的な発言があったという。(池田敏雄「柳宗悦と柳田国男の不親切」『民芸手帖』260 1980)

このように柳田・渋沢・柳の三者の視角・活動は、それぞれ柳田ー「民俗学」、渋沢ー「民具研究」、柳ー「民芸運動」と名づけられるような性格を持つようになり、民俗・民具はその性格を内包しながらも運動の名にはなじまず、民具は民具研究にとどまっていたが、民具学としての定立に田辺悟は言及している。(『民具学の歴史と方法』2014) 三者は隣接しながらも互換的とは言い難い関係性を有していたのである。

しかし、この三者に直接深く関係した有賀喜左衛門は、「何人も見るべくしてみなかった日常平凡の事象の中に生活の基本があることを指摘した点で共通していた」(『一つの日本文化論』)と指摘する。有賀は、学生時代、朝鮮に対する民族文化抑圧政策に抗議していた柳宗悦の影響を受け、東京帝大美術史専攻では朝鮮美術の研究に取り組み、「新羅の仏教美術」として卒論をまとめた。その後、柳田門下となり、1925年には、岡正雄とともに『民族』創刊に協力している。戦後は、東京教育大学で農村社会学を講じ、アチック・ミュージアムの後身、日本常民文化研究所の運営に尽力するとともに、1975年成立の日本民具学会では初代会長を務めた。

ここでは庶民の日常性、常民の生活文化に着目した三者の関係を、その対象とする領域、性格などから以下のように纏めておきたい。

柳田國男		渋沢敬三		柳 宗悦
民俗	>	民具	>	民芸
民俗学	—	民具研究	—	民芸運動

5. 「民俗」・「民具」・「民芸」と私

美と生活とを結ぶものこそ工芸ではないか。工芸文化が栄えれば文化は文化の大きな基礎を失ふであろう。なぜなら文化は、何よりもまず生活文化でなければならぬからである。
柳 宗悦『工芸文化』 1942

私は国立大学で初めて民俗学講座を開設した東京教育大学文学部史学方法論教室で個別科学としての民俗学を学んだ。専任教官は、直江広治・竹田且・宮田登であり、日本史教室から和歌森太郎・桜井徳太郎先生が参加し、柳田の学統に連なる錚々たる教授陣であった。教室は考古学とともに2専攻からなっており、国分直一・増田精一・岩崎卓也先生からは物質文化を見る目も教授された。その一方、学園紛争の余燼がくすぶる中、野の学・民俗学の経世済民の志を宿して各地を旅した。こうした中、山形県米沢市六郷町で農村の未来は教育にありと私費で幼稚園を設立、また農村の将来は過去を見据えてこそ開かれると、見捨てられていく農具を貰い受けやはり私設の「がらくた館」を建てていた篤農家・遠藤太郎氏との出会いが、民具と私との邂逅であった。手探りの民具の整理の中で仲間と物質文化研究会を立ち上げ『がらくた』というガリ版の冊子を作っていたが、それが日本常民文化研究所の河岡武春先生の目に留まり指導を求めることになった。民具研究の草創期でもあり、学会成立時には、有賀会長以下、宮本常一・宮本馨太郎はじめ、岩井宏美・木下忠ら大先輩が並ぶなか、最年少の幹事として加えてもらった。

こうして学生時代から40年余の米沢通いの中で私は、二人の民芸的作り手と出会い、親交を重ねてきた。(佐野賢治「置賜通い」『あるく・みる・きく』247 1987)

その一人陶芸の水野哲氏は、上杉鷹山が財政再建のために興した御用窯、成島焼に萩・唐津・上野焼などで修行した技法を加味し、成島の地で米沢の土、廃屋の茅、リンゴの芯など地元産の陶土、釉薬のみを使い、手回し、足けりの轆轤で「米沢焼」鳴洲窯として、明治期に廃窯、大正期に再興後、再び廃窯した成島焼を1975年から再再興している。(「やきもの断想—成島焼との出会い—」『がらくた』7 1977)

柳宗悦は、この成島焼について、

この窯の名は広く知られていない。また、広く知られるにすれば、質素なものばかり焼く。しかし出来栄えからすると窯の少ない北国では大事にされていいと思う。手法、様式に別に変化はなく黒釉一式である。火の具合で海鼠釉になると景色が出る。形確かで骨っぽい。都会では有てない特権である。(中略) 長型丸型の水甕、片口、飯鉢、平鉢、土だら、切立

等いう名は地方窯に相応しい。場所は米沢市に近い。詳しくは南置賜郡広幡村にある。どの系統の窯か歴史は審らかではないが、作風からすると本郷の窯と兄弟である。

「現在の日本民窯」『工芸』39 1934 (全集 12)

と高く評価している。

成島焼は今でも農家の漬物甕として、日常生活の中で使われているのを見ることができ。米沢地方の夏野菜の浅漬け、「三五八漬」(塩3麴5米8の割合)には木桶よりも成島焼の方が塩加減がよく出て重宝するのだという。成島焼には、湯たんぽ・尿瓶・飯の湯通しなど雪国の暮らしぶりをうかがわせる雑器が多く、まさに日常生活に密着していた(写真1)。



写真1 成島焼 置賜民俗資料館

もう一人は染織家(伝統工芸士・置賜紬)の山岸幸一氏である。市内の米沢織の織元の次男に生まれた氏は高卒後家業につくが機械生産の反物に疑問を持ち、結城紬など手織り世界に魅かれ、草木染色家、山崎青樹氏に師事、染と織の技術を身につけた。その後、アルカリ性を帯びた濁りの無い自然流水を求め米沢市郊外の赤崩に工房を構える。山岸氏は染料となる紅花・藍などから山繭まで自ら栽培、飼養し、草木や蚕と会話しながら草木染を仕上げ、糸に対して気後れしなくなったときに織りを始めるという(写真2)。



写真2 機を織る山岸氏と山繭

山岸氏は、当地に特徴的に分布する草木供養塔の拓本の掛軸を自身の「カミさま」として

床の間にかけて、「心豊かな貧乏人」をモットーに染織に励んでいるが、中でも寒中湿度が少ない2月、それも真夜中に冷やし染めする「寒染紅花」の染色で知られている。煮染とは違う風合いは素人目にもわかり、呉服商はもとより反物を求める個人の中にはわざわざ工房を訪ねその過程を実見して納得し帰る人もいる。

二人に共通するのは何よりも郷土、地元米沢の人文・自然環境が培った風土に根ざし、国内のみならず広く世界に関心を向け、技の向上に意を用いていることである。また、作り手と使い手との意思疎通が、相互に「モノ」を通してできる関係を築いており、それぞれの作品に反映されていることである。私も日常的に水野氏の焼き物を使っている。気心が知れ、当方の意も汲んで焼かれた器物での飲食は一味もふた味も違うのは確かであり、柳のいう生活の中での工芸、用の美を体感するささやかながらの実践をしている。(写真3)



写真3 我が家の米沢焼と愛用の酒器

ところで、遠藤太郎氏の「がらくた館」はその後、地元の農民たちが役員となって設立した(財)農村文化研究所付設の「置賜民俗資料館」となり成島焼コレクションも含む約一万点の民具を収蔵している。小さな研究所ではあるが、毎夏、農村文化ゼミナールを主催し、2014年の夏で26回を数えるが、昔話研究の一人者・故武田正、有機農業家・星寛治、そして私と、3人が常任的に講師を務めながら関係者を招き話題を提供してもらい民俗学的角度から農業問題はじめ地域の課題を取り上げ、論議する場となっている。星寛治氏は『地下水』の同人、詩人でもあり、宮沢賢治の農民芸術をまさに体現している人でもある。水野・山岸両氏も常連である。

農村文化研究所に集う人々の活動は、郷土人による郷土研究を地で行く実践といえ、そこでは、「民俗」－「民具」－「民芸」は生活の中に息づいているものとして一体として捉えられてきたといえる。私はその一端に触れえたことを実感している。

6. 郷土研究から世界常民学へ

今回取り上げた柳田の「民俗」、渋沢の「民具」、柳の「民芸」はじめ、庶民の日常生活、「民」への関心は、近代化という西欧文物の圧倒的な攻勢に対し、伝統的な自文化を軸足にしつつ、その流れに対抗・対応し、さらに新たな意味づけを加える志向では共通していたが、それぞれの対象のとらえ方、望まじきあり方については異同があった。いずれにしる三者の

生活文化への眼差しとそれぞれの認識は当時としては斬新であったばかりでなく、今日新たに注目されている庶民の日常生活を対象とする学問、日常史・history of everyday life 研究に対しても多くの示唆を与え、またグローバル化の中、ポストモダンから近代化の途次にある国々まで、世界の人々の生活文化が均質化する一方で個別性も持続し並行する今日、庶民の日常性、生活文化に注目する現代的意義を問う契機になると考えられる。

私の所属する神奈川大学日本常民文化研究所は海民研究と並び民具研究を研究の二本柱とするが、さらに文科省の認定を受け「国際常民文化研究機構」の拠点として、国家や民族の枠組みを超え、いずれの社会においても大多数を占める庶民層を「常民」として概念化し、等身大の生活文化を総合的に調査・研究・分析する方法論を確立し、多文化共生社会といわれる現代社会にあって、真の国際理解・異文化理解に資することが求められている。民具は可視的な物質文化であるだけに、言葉の壁を乗り越えて、国際的な常民文化研究の最適の資料となる。インターネットも利・活用できる IT 社会にあって、柳田の世界民俗学の構想も夢ではなくなったのである。今日、世界全体の幸福の実現、逆に最も不幸をもたらす戦争をなくすには、遠回りのようでも国や民族の境界を越えてお互いの生活文化を知り、理解しあうために“民の発見”の視点を再び見直す必要があるのではないだろうか考える。この拙文を、日中戦争の最中、満州の庶民生活への眼差しを『北満民具探訪手記』で著した、染木の言葉で結びたい。

民具は世界的に普遍性を持ち、政治の埒外にある。(中略) わが日本の人々もそういう苦い経験を味わっている筈である。著者はそれを思い、政治、時代に最も影響されがたい、もっとも簡素な民具と、それを作り成した風土、及び無害且可愛の物を記述せんとしたのだった。
染木煦『北満民具探訪手記』復刻版 1986 より

*本小論は2014年7月5日、南山大学人類学研究所で開催された5大学研究所連合公開研究会「民具と民芸」における発表の要旨である。内容が広範にわたり、又、当日はパワーポイントを使用したために、発表意図が散漫になってしまった感がある。この研究ノートでは、筆者が述べたかったことの要点を報告させていただいた。

参考文献

有賀 喜左衛門

1976 『一つの日本文化論』、中央公論社。

鶴見 俊輔

1976 『柳 宗悦』、平凡社。

芹澤知広・志賀市子(編)

2008 『日本人による中国民具収集—歴史的背景と今日的意義』、風響社。

丸山 泰明

2013 『渋沢敬三と今和次郎—博物館的想像力の近代』、青弓社。

Research Papers of the Anthropological Institute Vol.2 (2015)

前田 英樹

2013 『民俗と民藝』、講談社。

武田晴人・由井常彦

2015 『歴史の立会人—昭和史の中の渋沢敬三』、日本経済評論社。

Keywords

Folkimplement, Folkcraft, Folklore